

2021年5月30日（日）「過ぎゆく知恵／永遠の知恵」

《聖書協会共同訳》コヘレトの言葉 9:13-16

13 次もまた太陽の下で私が見た知恵であり、私にとってただならぬことであった。

14 小さな町があって、僅かな住民がいた。そこに強大な王が攻めて来て町を包囲し、これに向かって巨大な壘を築いた。

15 その町に貧しいが知恵のある男が現れ、知恵によって町を救った。けれども、この貧しい男を人々は記憶に留めることはなかった。

16 そこで、私は言った。知恵は武力にまさるが、貧しい男の知恵は侮られ、その言葉は聞かれることがない。

《新改訳 2017》伝道者の書 9:13-16

13 私はまた、知恵について、日の下でこのようなことを見た。それは私にとって大きなことであった。

14 わずかの人々が住む小さな町があった。そこに大王が攻めて来て包囲し、それに対して大きな土壘を築いた。

15 その町に、貧しい一人の知恵ある者がいて、自分の知恵を用いてその町を救った。しかし、だれもその貧しい人を記憶にとどめなかった。

16 私は言う。「知恵は力にまさる。しかし、貧しい者の知恵は蔑まれ、その人のことばは聞かれない」と。

【序論】

日本語でもよく使われる「ペンが剣よりも強し」ということわざは、元々英国の作家エドワード・ブルワー＝リットンの歴史劇『リシュリュウあるいは策略』の中に出てきたもののようです。この作品の中で、17世紀フランス王国の宰相リシュリュウは一つの許可書を持っていて、それに署名さえすれば法的に有効になってしまうから、「自分のペンによる許可書への署名はどんな武器にもまさる」ということを言っています。このことから、ある報道機関が世に伝達する事柄は、直接的な暴力よりも人々に影響があるという意味のことわざとなりました。

今日の箇所の内容はこのことわざと類似しており、知恵が武力に勝利した一つの例話を取り上げられています。量的には明らかに少ない側が、はるかに強大な敵を打ち倒していくという一面ワクワクするストーリーです。これは映画にもなるようなドラマ劇でありましょう。ところが、コヘレトはそのようなストーリーを紹介したうえで、相も変わらず尻すばみの結論でもって締めくくってしまうのです。せつかくの知恵であったが、それは人々の記憶に残るものではなかったと。そこには何の希望もありません。彼がここで伝えたいことの真意とは何なのでしょう。

【本論】

本論 1. 小さいものが大きいものに勝つ

次もまた太陽の下で私が見た知恵であり、私にとってただならぬことであった。(9:13) コヘレトは、実際に見たか伝え聞いたかは分かりませんが、彼が衝撃を受けた一つのストーリーを紹介します。「ただならぬこと」と訳された言葉 (גִּידּוּל / ガードール) は、「偉大なこと」「大きいこと」「重要なこと」などの意味を持ちます。彼が読者にとりわけ注目してもらいたい出来事だということでしょう。では、ストーリーの内容を丁寧に見てまいります。

小さな町があって、僅かな住民がいた。そこに強大な王が攻めて来て町を包囲し、これに向かって巨大な壘を築いた。(9:14)

「小さな町」「僅かな住民」という表現は「小ささ」「少なさ」を強調し、「強大な王」「巨大な壘」という「多さ」「大きさ」との鋭い対比を表現しています。途方もなく不均衡な戦争であることを伝えたいのでしょう。「壘」という言葉は、9:12の「魚が網にかかり」の「網」と同じです。強大な王に包囲され、まるで網にかかった魚のように逃げ場を失った小さな町の危機を表しています。ところが、結果は意外なものとなりました。

その町に貧しいが知恵のある男が現れ、知恵によって町を救った。(9:15a)

何と、この戦争は多くの人々の予想に反して、小さな町の方が勝利してしまったのです。しかも、その勝利をもたらしたのは、王でもなければ、王のブレーンでもなく、誰の目にも留まらぬような「貧しい男」でした。彼は貧しくあれども知恵がありました。それがどんな知恵であったかについては何も説明されていませんが、そのような出来事は現実に起こり得ます。

例えば、格闘技や相撲の世界では階級を超えた一戦が組まれることがあります。私の記憶に残る対戦としては、舞の海と曙の一番は大変面白かった。204cmもある大男を171cmの小柄な男が技術とスピードによってひっくり返してしまったのを見て歓声を上げた人は少なくないでしょう。紀元前に起きた戦争においても、似たようなことが記録されています。第二次ポエニ戦争が勃発したとき、前214年～前212年に発生したシュラクサイ包囲戦では、シチリア島全体を支配下に置いたローマ軍に対抗するため、科学者アルキメデスが発明した兵器によってしぶとく防衛されました(鉤爪、熱光線、投石機など)。最終的にシュラクサイは陥落し、アルキメデスも殺害されますが、彼の科学的な知恵が効力を発した戦争として有名です。

聖書中にもそれと思しき^{おぼ}実例があります。IIサムエル 20:14-22 を読んでみましょう。

シェバはイスラエルのすべての部族を巡り歩いて、アベル・ベト・マアカに来ていた。ビクリの一党も皆集まって来て、彼に従った。人々はアベル・ベト・マアカに来てシェバを包囲し、町に向かって外壁の高さほどの塁を築いた。ヨアブの率いる全軍が城壁を打ち壊して崩そうとしていると、知恵のある一人の女が町から叫んだ。「聞いてください。聞いてください。どうかヨアブに伝えてください。『ここに近寄ってください。あなたに申し上げたいことがあります。』」ヨアブが近寄ると、女は言った。「あなたがヨアブですか。」彼は言った。「そうだ。」女は彼に言った。「仕え女の言葉を聞いてください。」ヨアブが「聞こう」と答えると、女は言った。「昔、人々は『アベルで尋ねよ』と言って、事を決めたのです。私はイスラエルの中で平和を望む忠実な者の一人です。あなたは、イスラエルの中で母なる町を滅ぼそうとしておられます。なぜ、主の所有地を呑み込もうとなさるのですか。」ヨアブは答えた。「そのようなことは決してない。呑み尽くしたり、滅ぼしたりすることなど考えてもいない。そうではない。エフライムの山地の出身で、名をビクリの子シェバと言う者がダビデ王に向かって手を上げたのだ。その男一人を渡してくれれば、この町から引き揚げよう。」女はヨアブに言った。「おっしゃるとおり、その男の首を城壁の上からあなたのもとへ投げ落としましょう。」女は知恵を用いてすべての民を説いて回り、ビクリの子シェバの首をはねさせ、ヨアブのもとに投げ落とした。ヨアブが角笛を鳴らしたので、兵は解散し、町を去ってそれぞれの天幕に帰った。ヨアブはエルサレムの王のもとへ戻った。

ここでは一人の無名の女性の知恵が際立っていますが、彼女が行なったのは「すべての民を説いて回った」ということでした。まさに「ペンは剣よりも強し」と言える出来事でもあります。

本論 2. 地上の知恵は忘れ去られる

ただ、これらの出来事で一つ今日の箇所と一致しない点があるのです。今日のメッセージのポイントでもある。それは、コヘレトが見た出来事では、知恵ある貧しい男は誰の目にも留められず忘れ去られていったということです。先ほどいくつか挙げた例は幸いにも記録として残っているのですが、コヘレトが何よりも空しく感じたのは、信じがたい勝利をもたらした「貧しい男」の功績もその名前も、人々の記憶には残らなかったということです。

けれども、この貧しい男を人々は記憶に留めることはなかった。そこで、私は言った。知恵は武力にまさるが、貧しい男の知恵は侮られ、その言葉は聞かれることがない。(9:15b-16) 勝利をもたらす知恵そのものが蔑まれているわけではありません。知恵自体は重要であるのですが、それが役に立つのは短期間だけであって、長期的には意味をなさないという

ことをコヘレトは言おうとしている。「過去にこんなすごいことがありました」という伝承も、やがては化石となり、後の時代においては役に立たないものとなる。コヘレトが特に忌々しく思っているのは、その男が「貧しい」がゆえに忘れられていったということです。彼が社会的に地位のある人だったらその名を残したかもしれない。しかし、彼は民衆の間で取るに足りない人であったため、せつかくの貢献も彼の許には残らなかったというのです。ここでは明示されていませんが、もしかしたらこういう状況だったのかもしれませんが。貧しい男がすばらしい提案をした。その言葉が巡って小国の王の耳に届き、「よし、それで行こう！」と実施されることになった。ところが、その貧しい男があまりに社会的に目立たぬ人であったので、もはや発信源を見つけることはできず、誰か別の人の手柄となってしまった。このようなことは「太陽の下」の現実でよく起きているのかもしれませんが。

いずれにせよ、コヘレトが人間の知恵に高い希望を置くことに疑念を抱いているのは確かでしょう。その名声は色あせ、価値は失われることが多いからです。

本論 3. 神の知恵

ここで私たちは、一つの問いに直面します。では、永続する知恵とは何であるのか。人が真に価値を置くべき知恵、決して廃れることのない知恵はどこにあるのか。私がこのことを思い巡らしているときに浮かんできた聖句がありました。

十字架の言葉は、滅びゆく者には愚かなものですが、私たち救われる者には神の力です。それは、こう書いてあるからです。「私は知恵ある者の知恵を滅ぼし、悟りある者の悟りを退ける。」知恵ある者はどこにいる。学者はどこにいる。この世の論客はどこにいる。神は世の知恵を愚かなものにされたではありませんか。世は神の知恵を示されているながら、知恵によって神を認めるには至らなかったため、神は、宣教という愚かな手段によって信じる者を救おうと、お考えになりました。ユダヤ人はしるしを求め、ギリシア人は知恵を探しますが、ユダヤ人であろうがギリシア人であろうが、召された者には、神の力、神の知恵であるキリストを宣べ伝えているのです。なぜなら、神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです。きょうだいたち、あなたがたが召されたときのことを考えてみなさい。世の知恵ある者は多くはなく、有力な者や家柄のよい者も多くはいませんでした。ところが、神は知恵ある者を恥じ入らせるために、世の愚かな者を選び、強い者を恥じ入らせるために、世の弱い者を選びました。また、神は世の取るに足りない者や軽んじられている者を選びました。すなわち、力ある者を無力な者にするため、無に等しい者を選びましたのです。(I コリント 1:18-28)

ここで言われている「世の知恵」に対する「神の知恵」とは、人間世界の常識では到底理解することのできない「神の救いの方法」です。それは、経済力でもなく、軍事力でもなく、挫折にさえ見えるキリストの十字架でした。コヘレトの言葉に出てきた「貧しい男」は知恵によって町を救った。しかし、その小さな歴史的出来事はやがて廃れていきました。一方、神は人間に新しいいのちをもたらすため、ひとり子を世に遣わし、十字架という酷い刑罰による死にあずからせました。この出来事は一見社会改革に失敗した政治的リーダーの挫折に見えなくもありませんが、後になってそれとは全く本質の異なるものであったことが判明してきたのです。イエスの死は多くの人の罪の刑罰の身代わりであり、私たちが本来最終的に行き着くはずであった神の審きを一身に担った死であったというのです。このことをどんなに「この世の知恵」で説明しようとしても、到底できるものではありません。神の霊によって理解力が与えられ、神の知恵を悟らなくては、決して分かるものではない。この知恵は地上で廃れるものではなく、信じる人々の内で永久に生き続けるものとなるでしょう。

【結論】

コヘレトが例示した「貧しい男の知恵」は、空しく消えていきました。これは、この世界にやがて終わりが来るのであれば、あらゆる地上的営みにおいて言えることではないでしょうか。私たちの仕事も、経済活動も、何らかの偉業も、永遠には残らないものです。しかし、イエス・キリストを心に迎え入れた人には永遠が入り込み、この世で行なった神の国とのつながりを持つ働きが、天に持ち越されるようになるというのです。神との交わり、人を愛したこと、神の国の平和の実現のために努めたことは、この世界が終わった後にも残っていくでしょう。空虚なる世界に生きる者に永遠が入り込んだ。それが、主イエスが世に来られた意味であり、十字架はその礎となったのです。

【祈り】

知恵と知識の源であられる神よ。人の世には多くの不可思議なことがあり、知恵によって少数が多数を打ち負かすということもまま見られることです。しかし、どんな偉業であっても、それは永遠に残るものではなく、コヘレトの言葉を借りれば「空しいもの」です。ただ一つ廃れることのないもの、それは主イエスの十字架の福音以外にありません。また、あなたは地上で築き上げられた信仰者の神との関係をそこに加えてくださいました。私たちはこの希望を胸に永遠への道を歩み続けます。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

すべての知恵の基、全世界を無から有へと創造し給うた、父なる神の愛、

消えゆく世の営みに、永遠に残る福音を残し給うた、主イエス・キリストの恵み、

信仰者の内に確立された神との関係を、後の世まで受け継がせ給う、聖霊の親しき交わりが、

あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。